

✿ 平城宮跡資料館 秋期特別展

「地下の正倉院展—木簡学ことはじめ」

「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」

1963年8月、真夏の平城宮跡の内裏北外郭官衛で、驚きの大発見がありました。後にSK820と名づけられるゴミ捨て穴から、約1,900点もの木簡が出土したのです。平城宮跡で初めて木簡が見つかったのは1961年1月のことでしたが、点数は数十点ほどでした。そこに、まさに空前の大出土。当時の調査員たちは興奮や喜びとともに、あるいはそれ以上に困惑を覚え、苦難に直面したことでしょう。

しかし、この発見は、日本の木簡研究を飛躍的に押し進める起爆剤となりました。SK820出土木簡には文書・付札・習書といった古代日本における木簡の典型的な用法が凝縮しており、これらの調査・研究を通して木簡学の礎が築かれたといっても過言ではありません。そして、それは、全国の出土木簡の総数が40万点に迫ろうとしている現在も、高い有効性を保っています。

今年の「地下の正倉院展」では、このSK820出土木簡を中心に、産声をあげたばかりの木簡学が大きな成長を遂げてゆく過程を描きたいと考えています。研究の最前線に立った調査員たちの四苦八苦・試行錯誤を追体験しながら、木簡研究の基礎部分についての理解を深めていただきたいと思います。

そして、奇しくもこの木簡の大発見となった年、1963年4月に、平城宮跡発掘調査部(現 都城発掘調査部(平城地区))が誕生しました。本年は、特別展と同時開催で、「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」と題し、平城地区の発掘調査の歩みを写真で振り返ります。こちらもお合わせてご覧ください。(都城発掘調査部 山本 祥隆/企画調整部 渡邊 淳子)



SK820発掘調査のようす ※展示情報は巻末ページ